

# 永遠性を希求する主体とは何か

——トランスヒューマニズムと自己超越——

冲 永 宜 司

## 問題提起

永遠の生は古くから人類に抱かれ続けてきた理想である。しかしそれは、現世での生をそのまま永遠に継続させるのではなく、むしろ現世での姿は仮のもの、もしくは不完全なものであって、現世から翻って完全化、純粹化した姿で永遠性を獲得するのが基本的な考えであった。プラトンのアイデアは永遠であるが、それはアイデア界のものであり、地上の事物はその模写にすぎず、洞窟の壁に映った像にすぎない。キリスト教で言われる永遠の生は、神の愛のうちにある霊において実現されるのであり、そこに到らない肉体が抱く生への欲求がそのまま永遠化されるのではない。

それに対して、近年科学技術によって永遠の生を実現させる試みが拡大しつつある。これらはトランスヒューマニズム（以下THと記す）と総称されるが、それには現世で私たちが持つ不死への欲求を実現させ、そのまま永遠化させようとする特徴がある。しかもアイデア界や神といった自然を超えた超越者にその実現を委ねるのではなく、自らの科学的方法で人間と自然を作り変えることによってその実現を試みる。それは自らの手で自然を解説し、それを支配しようとする近代科学の理念の延長と言える。近代科学は人間の自己拡大を実現するために発展してきたので、不死への欲求も自己の欲求として拡大され、超越者の側からその欲求が転換され純化されることはない。

近代科学とは自然を客観化、数量化し、無機的な原子の集合離散に還元した。他方で、自然を観察する主体の存在だけは前提とされ、その理由が問われることはない。近代科学はこの構図の上で、人類史に例を見ない著しい成功を実現してきた。しかし主体の存在が問いの中に入ってこない限り、その死もこの科学の扱う範囲にはない。そして死を避け生き続けたいと思う私たちの欲求も、科学の問いの対象になりにくい。したがってその欲求の理由を問わぬまま、生をそのまま永遠化することは、ある意味近代的 세계觀の必然でもある。このようにTHは一種の科学信仰とも取れる面を持つ。しかしそれは特殊な教団内に閉じられたものではなく、現代に普遍的に見出せる思想や運動であるところに、その特徴と、また問題点がある。これは永遠の生の試みを荒唐無稽とは見なせない要因になっている。

THでは、脳や身体全体を液体窒素のような超低温で冷凍保存し、科学が発達した将来における復活を試みるものや、意識をコンピュータにアップロードさせそこで意識を永續化させる試みなどが代表的である。<sup>(1)</sup>肉体と精神とを区別し、牢獄としての肉体を脱して本来の精神の永遠性を実現するという理念の新たな形態が、ここに典型的に見られる。そこで伝統的思想における、現世を超えて純化された精神の永遠性に対して、現世の肉欲のままの生存欲求を永遠化するTHの特徴が示される。これは伝統的思想では信仰より呪術や魔術に見出される特徴だが、THは現代科学技術への強力な信頼の上にその特徴を増大させている。そしてこれは、無限の自己拡大の方向性であり、その危険性と、そこからの転換の可能性について私たちは考えなくてはならない。

そこで、THが肉の欲求の充足を目指す科学に基づきながら、他方で肉からの離脱を唱える点で、そこには一種の矛盾と飛躍があることに着目する。それは、かつての欲求の純粹化に代わる、ある種の転換の可能性を示す。シンギュラリティはこの転換にあたる。こうして仮にTHの理想が実現した際、どのような宇宙が将来展開されるのか、もしその宇宙が純粹な精神であれば、それは何を求めるのかについて考察する。

## 一 THの理念と意識の移植

### —— THは何をしようとするのか

身体や脳の冷凍保存では、そのニューロンの配線状態を隅々まで解析して、その脳の所有者の生前の脳状態、意識状態を別の基盤に再生

させようとする。また、生きている人間とコンピュータとの接続、その記憶や行動習慣のアップロードでは、コンピュータのシステムをその人間と同じに機能させようとする。そしてアップロードされる意識の範囲も、行動習慣の一部から意識の全体まで、様々な段階がある。そしてこれらの試みは、近年では一部のコンピュータ科学者、脳科学者、哲学者などだけではなく、IT産業をはじめとした先端企業のCEOに相当するような人物<sup>②</sup>までが手がけ、会社設立や資金提供を行っているものである。つまり狭義のTH運動内部だけでは閉じられていない。それは、近代科学の理念、そして資本主義を基底とする企業理念自体が、THの理念に共通する波長を持っているからである。その意味でTHは、近代社会の申し子の性格を含んでおり、特異で極端な思想運動として一蹴にはできないところがある。

THの思想の骨子は、元アルコー延命財団<sup>③</sup>のCEOで、エクストロピー研究所の創設者であるマックス・モアの論説に端的に示されている。エクストロピーとは、系が最終的に秩序を失い熱的死に到る熱力学のエクストロピーの逆で、系が自らの秩序を熱力学に逆らって限りなく増大させて行く方向を指す。エクストロピーでは秩序喪失が自然である限り死は自然であるが、エクストロピーは「死自然主義」に抵抗し、系は自らの変容を通じてより秩序化された何かへと進化する。モアがTHの要点について論じた「THの哲学」では、エクストロピーの哲学は「科学と技術の手段によって、生命を促進させる原理と価値に導かれて、知的生命の進化の継続と加速を、その目下の人間の形や人間の限界を超えて行うこと<sup>④</sup>」と定義される。つまり生物的な形態にとらわれず、生命を強化、延命させることに特徴がある。それは単なるエントロピーの対義語を超え、二〇〇三年には、「永続的な進歩、自己変容、実践上の楽観主義」などの定義が加わっている。進化はある地点で停止するのではなく、「永続的」に行われ続けるのであり、そしてそれは何より人為的で「合理的な思考<sup>⑤</sup>」によって行われることが特徴である。これはTHの自己拡大があくまで科学的、合理的方法による人間の自己拡大を意味し、超越者による救済や、自己の滅却とは異なることを示している。

ただし生物学的身体に捉われない能力拡大としての「形態学的自由」の考え方は、人間の能力を価値的、倫理的判断の下、人類に普遍的に役立つようにするのではなく、狡知的な認知能力も含め、本能が求める能力だけを特権的に強化することが目的となっているように映る。しかしモアは、そうした認知能力の増強とともに、「より洗練された情緒<sup>⑥</sup>」も達成目標であるという。実際、本能的欲求充足の快が増えることと、それが幸福であることは別問題であり、ときには肉欲的な快を断ち切ることが却って幸福につながる場合もある。THはそ

れをどこまで扱い得るかも、吟味すべき課題である。

## 一―二 THの哲学的立ち位置

THは哲学上の立場においてどこに近いのか。まずそれは「継続的な過程であり、完全なる状態の希求についてのものではない」というものがある。つまり世界は発展的過程であり続け、特定の終結点はない。しかも世界は快の実現に役立つように作り変えられる。この意味で「パース的なプラグマティズムの形態」に通じているという。しかも経験される世界はそのまま実在の世界であり、ヴェールで覆われた観念の世界ではない。その意味で「実在論の何らかの形態を受け入れる者もいる」という。<sup>(8)</sup>

次にTHは「全般的な批判的合理主義」であるという。これはデカルトに始まる「基礎づけ主義」に対置される。無条件で「正当化されたり問われないでいるものはな」く、知と実在の全体が批判、改変に晒されるからである。もちろん、デカルトのように懐疑から免れる「神」もない。

またTHは唯物論であり、かつ機能主義である。それは、「自己とは何らかの物理的な媒体の中に例示されなくてはならない」、つまり物質を離れた意識や霊魂を認めない意味で唯物論である。しかし「それは必ずしも生物学的に人間である媒体とは限らない」、つまりその物理的媒体は、自己の機能を実現できるならば生物体に限定されないという意味で機能主義なのである。<sup>(9)</sup>

それでもTHの機能主義の内には矛盾も見られる。それは機能主義と心の実体化とは相容れない一方、THでは自己拡大や能力強化の欲求は根本前提になっている点である。モアは心について、「心の状態は、その因果的役割から成り立っている」とする。それは心を実体ではなく「状態」と特徴づけた上で、「他の心の状態や感覚入力や行動上の出力への因果的關係」として心を見なすことである。心が関係の言い換えであるなら、それは特定の働きの実体的な起点にもなり得ない。ここに中心はなく、言わば縁起的な関係しかない。実際、「自己の境界は不鮮明であり、単一の身体的位置に限定されない」ならば、その自己が他を排除する利己的な自己に限定されるのはおかしい。単一の身体に限定されるからこそ、私の拡大欲求が生じる。反対に自己の境界がなければ、自己拡大の意味もない。

機能主義に立ちつつ自己拡大を前提するというTHの矛盾は、THが二元論であるという批判があることから理解できる。確かにモ

アは、「それらの批判は二元論と機能主義とを混同している」とかわす。しかしTHは唯物論でありながら、他方で自己の永遠性への希求を主題化する限り、物質と自己との両方を実体化する傾向は否定できない。THが自己をどこまでも機能だと見なすなら、なぜそれを永遠化するのか、なぜそれにこだわる必要があるのか、という疑問も生じる。つまり機能主義的主張を一貫させるなら、自己を拡大させるというTHの原理自体が揺らぐのである。この意味では、THは二元論であった方が首尾一貫している。

次に、THにおける實在論の意味を考察する必要がある。いわゆる科学的實在論では、主観的な観念が認識されるのではなく、實在する外界がそのまま認識されるという考えがある。しかしこれは意識アップロードから導かれる「シミュレーションとしての世界」においては成り立たない。シミュレーション技術が指数関数的に発達するなら、實在つまり現實はシミュレートでき、意識がそこに入って行けるなら、シミュレーションが現實になるからである。モアは、「私たちは自分たちの時間のほとんどをシミュレートされた環境、もしくはバーチャルなオーバーレイを伴う「現実の」環境の中で過ごすようになる。」<sup>(12)</sup>と、「バーチャル」と「現実」とを区別しない考え方を認めている。他方で物理的身体を持つ人間は、現実の物理的状态とコンピュータ内部のシミュレーションとは区別されると思っている。これは自分の身体がシミュレーションではないと考え、両者の区別を常識にしているからである。しかし問題は、自らを物質的、生物的存在だと考えている人間が實在世界だと思ひ込んでいる外界も、実はバーチャルであることを絶対的に否定できる根拠はないことである。したがって實在論的世界は、突き詰めると観念論的世界、もしくは汎心論的世界と区別がつかない。

### 一―三 THと宗教的信念との類似と相違

THがバーチャル世界を實在と見なす汎心論を許容したとき、THは宗教とは折り合うのか。確かにTHと宗教とは、唯物論と唯心論、無神論と有神論という区別において根本的に異なる。しかし物質世界とバーチャル世界との区別が消滅するなら、唯物論と唯心論との区別はなくなる。神の存在についても、仮に心的なものを神とするなら、世界のすべてが神である汎神論には近くなる。しかし両者の違いに関して、「合理性に適合する中心的な位置は、THと宗教との間の緊張を示す」と言われるように、あくまで合理性な立場を最後まで貫こうとするTHと、最終的には合理性を超えたものを受け入れる宗教とでは、非合理の許容の有無において根本的に異なる。THは合理的、そ

して自己拡大を唱える。これは科学への信仰でもある。他方宗教は最終的に非合理的なものを受け入れ、自己は「より以上」の何かに委ねられる。

モアも、「宗教は人間に対して、人から神を鋭く区別するよりもむしろ、より高く、より神に似た水準へと高まることを許容する<sup>(13)</sup>」ことを認める。宗教におけるこの「高まること」は、THにおいて不死という神の領域へ近づくことに相当する。また、合理性への固執は、THが宗教から区別される点だった。では合理性とは何かという問題になるが、近代的な合理性とは、客観的な物質をそこにない主観的な意識から観察することの中に成り立っている。そこからするとTHにおける物質と意識との無区別状態では、近代的合理性の根拠が消失している。THにおいてシミュレーションの中の自己は、物質と意識との区別がなくなった状態だからである。THのバーチャル空間では、こうして意識と意識ではないものとの区別が消失しているので、物質も意識も実在とはならない。その点で仏教の無我<sup>(14)</sup>にも通じるところがある。ただし仏教は欲求の無化を目指す<sup>(15)</sup>が、THはあくまで欲求に従った能力強化を目指す点<sup>(16)</sup>が異なる。

## 二 THにおける自己拡大欲求のゆくえ

### 二一 唯物論としてのTHに内在する二元論的傾向

THの根本的な考え方に、自然状態の否定がある。意識が身体から派生しその中にあるのが、生物が進化の結果獲得してきた「自然状態」である<sup>(17)</sup>だが、THは意識を本来、身体の中にあるべき存在ではないと考える。そして意識の身体からの離脱を促すのが「技術」であり、この脱出が本来の進化だとされる。技術はもともと、体から離れるための方策であり、技術によって「自然状態」も生物学的なものから無機物的なものへ取って代わるのである。これは人間の能力が「自然」さえ作り変えることを意味する。

したがって身体の中にある意識という「自然」から、身体を離れた意識という「自然」へと私たちは置き換えられる。後者はレイ・カーツワイルも指摘するように、「私たちの真の本性は情報のパターンであつた<sup>(18)</sup>」というTHの基本的考えに基づく。その考えでは、その情報<sup>(19)</sup>が何を基盤としているかは本質的な問題ではないからである。「だから私はあるときには生物的身体を持ち、別のときは持たないことができ、それから再びその身体を所持し、そしてそれを交換し、などといったことができた<sup>(20)</sup>」。つまりTHでは情報がかつての魂のように考え



られているのである。そこからすれば身体は非本質的な、交換可能な容れものとなる。

確かにTHは肉体を牢獄とし、物質的なものからの離脱を目標とする点はプラトンので精神の純粹性を尊重するかのようである。しかし他方でTHは、科学への信仰という、きわめて唯物論的な傾向も併せ持つ。そしてこのふたつの矛盾した性質の並存は、純粹な情報にすぎないはずの精神が、生物的な肉欲をそのまま持ち続けた状態としても考えられているという矛盾をもたしている。これは魂の不死と唯物論との矛盾でもある。

このように、身体から心が離れても、心が身体内で生じたからこそ備わる、生物的な心の性質からは離脱しないのかという疑問は生じる。これはコンピュータへのアップロードによって意識を非生物的、無機物的にする場合、生物的身体が持っていた欲望、欲求はどうなるかという問題でもある。

マインド・アップローディングを先頭に立って唱えているレイ・カーツワイルの世界的に有名な『シンギュラリティは近い』の中でも、例えば私たちの美的感覚についての相矛盾する見解が見出される。ひとつは、脳がほぼ機械化されても美的感覚は変わらないという主張がなされる。「ほとんど非生物的な脳を以てしても、人間の身体からの美的な流入が脳へと持つ影響が与えられるなら、私たちはこの美的で情緒的な流入を維持するだろう」と。しかし他方でこの維持は、「まだ人間を今日的な基準で見ている」結果だとも指摘される。そこからすれば、「私たちの身体が持つであろう大きく拡大された可塑性が与えられるなら、美を構成する観念は時間が経つにつれ拡大されるだろう」と、身体の機械化、能力の拡大化に伴って美の性質も変容すると言われる。つまり感覚や欲求も、身体が無機物化とともにまったく別様に変化し得ることになる。するとたとえば、死を根絶しようとする欲望が身体にもとづくものである限り、身体から心が離れるに到れば、その欲望自体が変容する可能性もある。これは意識が我欲や死への恐怖を持ったまま、コンピュータにアップロードされることとは異なる。

この我欲の維持は、THが唯物論でありながら、精神を物質とは別の存在と見なす二元論的な傾向を持つゆえの帰結である。そして二元的存在の一方である精神を、他方の存在である肉体的な欲求のまま捉え、しかもその精神を永遠化しようとするのは精神の実体化である。他方で科学技術による意識のアップロードでの機能主義的な意識コントロールは唯物論的理想である。これは近代科学が唯物論でありながら、物質を観察、支配する人間の視点だけは、その物質世界の例外であり続けてきた構図からの帰結である。

## 二二 人間の存在欲求は昇華されるか

生物的な欲求は機械にアップロードされてそのまま、もしくは強化された仕方が残るのか。機械化されて強化された認知能力、計算能力を以って支配欲求、自己拡大欲求、存在欲求も強化されるなら、それは恐ろしい展開になるだろう。それとも機械化は生物学的欲求にある種の転換をもたらし、より昇華された欲求の姿になって行くのか。これは本論三節の仏教的THでも主題的に扱う問題である。

現在のTHでは、生物学的欲求は機械の中でも変わらないという考えが主流である。実際、グーグル社の共同創業者ラリー・ペイジが二〇一二年にカーツワイルを採用し、技術課長としたのは、人間の生物学的基盤の能力を機械が吸収する世界についてグーグル社の面々が理解できるようにするためであった。<sup>(18)</sup> グーグルの考えには、人間の能力をコンピュータに移行することで、人間が持っているままの欲望を拡張し、また充足させる未来像があったことになる。それは生物としての人間の能力を超える能力を以って、人間の欲望をかなえる思想である。

しかしここでも、なぜ生物学的基盤に基づいて生じる欲望が、機械化された基盤にも妥当するのかという問題は残る。この思想は裏から見れば、機械化によって生物学的な欲望の方が変化する可能性の否定になるからである。また、生物学的な基盤に基づく欲望を前提としてそれを満たす構図は、満たしても満たしても果てがないというループ構造を生み出す。つまり際限ない欲望の拡大を前提にすることは、充足可能性とは結局矛盾してしまう。確かにTHは特定の地点を終点とは考えないが、欲望についてこれは際限ないたちこつことになってしまう。このいたちこつに関して、TH内部から解決の可能性を探してみる。それはTHが私たちの内的な気づきをも開発しようとする側面である。THは拡大された欲求を充足させようとするとき、その欲求する主体自身の仕組みを解明しようとするのである。マックス・モアはその論文「ポスト生物学的生命の強化された肉欲」において、将来の私たちが生物学的な肉体に縛られない「形態的自由」<sup>(19)</sup>を所持し、そこで認識能力などを益々強化して行くことを唱える。そしてこれは能力強化による自由の獲得であり、かつ「自己コントロール」<sup>(20)</sup>による自由獲得であるとも主張される。そこでは認識能力が外部世界について知れるのと同じく、「私たちの内的な形式と機能」<sup>(21)</sup>についての知を強化してゆき、「私たちははるかにより多く内的に気づく選択を持つだろう」と言われる。この自己認知能力を備えた主体は「ハイパーエージェン



「シー」と呼ばれ、その結果その主体は「存在のより優れた豊富さと実存的な自由」<sup>(22)</sup>を獲得するというのである。そこには、自分の肉体の姿や形を変えるだけでなく、さらに自己自身への知識をよりよく獲得することが自由の達成にもなるという考えが見られる。しかし問題は、自己を知り、自己をコントロールし、自己の姿を変えても、欲求の姿は変わらないのか、という点である。実際、自己の内面についてよく知ることは、欲求の質を変化させ、またその充足のあり方も変化させて行く。<sup>(23)</sup>これが高じて行くならば、自己知の発達が当初の欲求の根拠を覆すという段階に到っても不思議はない。

するとここで、反対に欲求の無限なき拡大とは、自己への無知ゆえに助長されるという事実に着目しなくてはならない。言い換えれば、自己への知とは、その欲求の原因を説明することで当人に欲求の根拠を自覚させ、そこで欲求からの解放を促す可能性がある。しかし実際は、モアでは欲求充足へ向かった自己と、自己への知識とが矛盾せずにそのまま増大してゆく描かれ方をしており、そこでは自己の知によって欲求の姿は多少変化はすれど、本質的には取り除かれることはない。一体本当に取り除かれ得ないのだろうか。

確かにモアの言う自己知とは、まず特定の脳内物質が特定の快の感覚に結びついているような客観的な知識を指すだろう。これは快への欲求のメカニズムを明らかにし、快を組織的に作り出す方法を教える。しかしこの客観知は、たとえば依存症における、特定の化学物質への依存のメカニズムの場合もある。そこでは、依存物質を増やすのではなく、依存物質から離れるメカニズムとその方法の習得がむしろ解決になる。そこでは欲求充足の拡大をするのではなく、むしろ欲求の前提を断ち切ることが解決手段である。つまりここでは、自己についての客観知が、欲求充足と幸福とが異なるという洞察に導くのである。それに対してモアの唱える自己知は、このように欲望自身の根拠を反省し、欲求充足自体を断ち切る方向には行かない。これはモアの自己知の不十分さを意味すると思われる。

このように、欲求する自己自身への洞察は、最終的にその欲求自身をも覆してしまうところがある。外的世界についての客観知、科学知の目的は、自己拡大に則って世界を支配することだった。しかし自己自身への洞察は、欲求自身の根拠にまで到る限り、この構図が必ずしもあてはまらない。そこでは、世界を支配しようとする自己自身が転換するため、この支配欲自体がリセットされるからである。したがって、認知、行動、身体能力の強化というモアの理想もリセットされる。実際、西洋哲学の伝統の中でも、己自身を知ることが欲求拡大ではなく、己の無知についての自覚だった。そこでは自己の根底へと到ることで無反省な自己拡大を覆し、しかもそれが幸福の実現につながっ

た。問題は、自己を知ることによって自己の欲求自身の転換が起こるとは、いかなる過程なのである。

## 二―三 自己拡大しようとする実体はあるか

モアの唱える、人間の能力強化 *enhancement* とは、それを強化してより自らを拡大しようとする自己を前提とする。この自己はあたかも実体のようである。しかしTHの意識アップロードの思想自身の中には、その実体性と矛盾する要素がある。それは意識が基盤に依存しないことで、意識の姿や性質が定形化できないことである。

確かにTHで考えられる全脳エミュレーションは、意識の基盤非依存に基づいている。それは、部品をあちこち交換してどこがもとの船かわからなくなっても、同じ船として動いている非実体的な「テセウスの船」として意識があることを意味する。生物的基盤からコンピュータチップへと基盤が交代しても同じ意識だと言うなら、意識に実体的な同一性はない。またこれは、七年ほどで細胞がすべて入れ替わっても同じ人間として認知されている生物学的な人間にも、また人格を形成する記憶内容が大部分入れ替わっても同じ「私」であると考えられている特定の人格についても成り立つ。変化前と変化後の自己を同じにする実質はないが、それでも同じ「私」という名辞によって同一化されているにすぎない。つまり唯名論的同一性が意識の同一を形成している。

すると基盤が交代しても同じ能力拡大を欲求する主体は定められず、したがって自己拡大を欲求する主体の実体性も考えられない。これは反対に見れば、実体のない何かにでも欲求があり得ることになる。するとそれは特定の自己の能力強化ではなく、特定化を超えた普遍的な何かの欲求となることが考えられる。

このように意識の非実体性は、自己拡大を無限に行おうとする近代的な主体とは相容れない点がある。したがって「私」の記憶や性質がすべてコンピュータの中で再現されても、それは機能的な「私」であって実体的な「私」ではない。しかし反対に「私」を機能に還元することもできない。このようにAであってAではないという姿が「私」を形成している。<sup>(25)</sup>瞬間物質輸送機で電送された「私」<sup>(26)</sup>も同様であり、七年前と七年後の、異なった細胞と記憶の「私」についても同じである。したがって、「私」の記憶や性質のコンピュータへのアップロードは成功するかもしれないが、それは永遠性への欲求を持つ実体的な「私」のアップロードにはならない。またこの欲求を、高度な認知能

力を所持するコンピュータが持ち続けることも疑わしい。むしろアップロードされた意識は、「私」には実体もなく、永遠を希求するものも、そこへの執着もないことを暴露させるかもしれない。却ってその「無さ」が、本当の永遠性を示す可能性がある。

### 三 仏教的悟りとTH

#### 三― 仏教THは私の消去をどう位置づけるか

前節までは、THにおいて魂や「私」のアップロードがいかにかえられているかを見てきた。そこで次に、THが達成する境地が、魂の救済、特に仏教的な悟りとどう類似し、どう違うかを考察したい。仏教的な悟りは自力的で、合理性を超えた超越者への信仰という性質は薄い点でTHと共通する。しかしTHのように欲求を拡大、充足させるのとは反対方向の救済を目指す点で、THとの比較検討に意味があるからである。

仏教THの組織的な実践者ミヒヤエル・ラトーラは、その「仏教THとは何か？」において、仏教THを「アジアの古来の仏教と西洋世界の科学技術への現代の方向づけとの出会い」と見なし、その実践を「これらを新しい革新的な仕方で結びつける勃興しつつある運動」として特徴づける。ラトーラは両者に「多くの共通の目的」があるとし、「この運動は、苦を減じて悟りを実現するという伝統的な仏教の目的を達成することを求めるが、科学的知識と技術的手段の支えとともにそれを求める」という。つまり彼によれば、能力増強や不死を実現しようとする科学技術と、仏教的な悟りは矛盾しないのである。

しかし、意識が肉欲のままではなく、そこで執着を離れる魂の純化が経られなければ、機械の意識になっても「苦を減じ」ることは不可能ではないか。結局、その意識同士においても、自らの領域を他の領域を退けて拡大しようとする闘争的な自己拡大、自己強化への執着が変わらない限り、機械の意識になっても「悟り」はない。

つまり仏教には執着のような何かを取るという過程が、反対に積極的な喜びの実現になるという伝統が見られるが、この何かを取る過程がTHには薄いのである。確かにラトーラは、「西洋から見た仏教理解に、自己の消去がとらえられにくいことがある」ことを否定しない。

しかしそれは西洋的な仏教理解を理由にして、元来仏教では不可欠だった自己滅却の過程を、他の手段で代替することを正当化させようとするものである。

そのひとつが、「四諦」をスピリチュアルな上昇の「技術」として解釈し直す試みである。THは「技術」を通じて人間の「境遇」(condition)を超越しようとするからである。しかし「技術」は自己を変える方法というより、人間の生物的な欲求をより効率的に充足させる手段である。そしてラトーラはそれを用いて、永遠に生きる欲求を究極まで実現しようとする。このようにラトーラには、一方的に人間の欲求を司る器官のエンハンスメントを唱えるところがある。それがTHの言う「超越」であって、そこには欲求の抑制と無我の実現を通じてスピリチュアルな上昇に導くという伝統的な考えは見えにくい。

同様にラトーラは八正道も独自の考えで捉え直す。八正道は本来、「正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定」と、どれも鍛錬を通じて自らを変える方法を示す。それに対してラトーラの八正道は、「バイオテクノロジー、ニューロテクノロジー、認知科学、コンピュータ科学、ナノテクノロジー、それらに関連した諸々の行法」<sup>(28)</sup>とされ、ここでは科学的客観的手段が主となり、自らの鍛錬や変化は従の位置でしかない。「仏教が宇宙的な統一への自己の滅却を呈示し、瞑想を、悟りを達成させるための実践的な道筋として強調する一方で、THは発達した科学技術を用いて世界を変えることを欲する」、つまり自己の改変ではなく世界の方を変え、人々が「ユートピア社会の中で機能できるようにする」という。それに比べると、「終末論と実在の究極的本性への哲学的関心」といった「内的な秘儀的核心」<sup>(29)</sup>は主観的関心事にはならない。

ラトーラは「より快適に歩くためには、大地の全体を覆うのを試みるよりも、あなたの足を覆うほうがよい」という仏教の考えを批判する。これは幸福を得るには、世界を改造するよりは、苦の原因となる自分を変えよという考えだが、ラトーラは「多くのTH主義者があって地球を心地のよい物質で覆うだろう」とする。仏教THの目的は、「地球の大きないろいろな区画を、人々が裸足で安全に行くことのできる優しくて心地よい土地に」<sup>(30)</sup>することだからである。

しかし科学で世界を変えることで、悟りは実現するのか。確かに仏教の教えの中には、行の実践の中へ科学技術の導入を禁止するものはない。ダライ・ラマも、人を幸せにするならば、脳科学などの科学的認識が仏教と矛盾する場合、仏教の考えを変えることに躊躇しない。<sup>(31)</sup>

科学によって否定される神がない分、仏教はキリスト教より科学を受け入れやすいとも言える。それでもTHが仏教に関係する限り、それは科学主義的に世界を変えるだけではなく、自己自身をも変える側面がなくてはならないはずである。これは、機械の中に意識が入る際に、自分自身も変わることの許容へと導く。

### 三―二 自己滅却か世界の無限変化か

確かにラトローは「仏教徒の瞑想技術」に着目している。そしてそれを、「個々の実践者を作り変えるように設計された心の科学」に作り変えるのがラトローの考えである。問題はこの「心の科学」が、欲望の姿を変えないまま、世界を改造して幸福を実現する技術なのか、それとも自己を改変し欲望の姿をも変えることで、その実現に到る技術なのかである。

苦を減じ、より快適に生きるには、科学技術で世界を改造した方がよいというのが仏教THの考えたつた。これは自己の滅却とは反対に、自己の欲求の拡大を止めない方向になる。しかし元来の仏教では欲求による執着が苦の原因なので、技術が世界を無限に改造して行くことで欲求を充足させても、それは対症療法でしかなく、苦の原因を根本的に絶つことにはならない。それは結局負のスパイラルにしかない。

仏教THがこの世界改造の方向を徹底すると仮定するならば、コンピュータにアップロードされた自らの意識を拡大しても、コンピュータの処理能力が無限になれば、その拡大が苦を生み出す他の意識との衝突を回避させ、自己保存欲求を満たしてありあまることが考えられる。つまり欲求の拡大よりも、それを充足させる処理速度の増大や、快を提供する質の上昇の方が常に上回っているのであれば、意識は苦に陥ることはない。これは苦の原因としての欲を減するのではなく、欲をいくら拡大しても満たされるという方向、拡大が妨げられないままに欲求を満たす物質的な条件が整えられる未来である。ある意味これは、近代の理性、近代の科学が目指す究極的理想の世界である。

もちろんラトローは、仏教らしく、自己の側を変える行に相当する過程を念頭には入れている。しかし脳や身体についての客観的な知識を用いて、科学的方法で欲望をも制御して幸福を導く方法は、彼において中心的手段なのである。これは例えば薬物による意識コントロールと本質的には変わらず、鍛錬で自己を変えて行く方法とは相容れない面が残る。確かにこのふたつの方法を明確には区別し得ないかもしれ

れない。しかし後者の伝統的方法では、自己鍛錬によって得られた自己と世界とは一体でその外部がないのに対して、前者の科学的方法では、常にその幸福享受システムを客観的にコントロールする、そのシステム外部の統御者がいる。

この客観的方法は、オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』において、未来世界で人間が苦痛を感じないほどまでに欲求充足の装置が整えられ、苦痛を感じる情報が統制されて苦痛や悪が一切排除され、快樂しか経験しないよう、作為的に無知蒙昧にされたまま置かれている状態にも一部重なる。しかもこれは唯物論に基づいた近代科学の理念の究極において実現される世界に他ならない。しかし異なるのは、『すばらしい新世界』では、人間を快樂状態に置く装置は人間が作り、統制された人間に虚構の世界を見せはするが、意識は藥物的、人為的にコントロールされるにとどまる。しかもこの構築物は人為性がなくなれば破壊され得る。だから限界のある、脆い構築物なのである。

それに対して仏教的なT.H.の理想では、機械化され、しかも苦を滅せられた主観的狀態を作るシステムは、人為性を超え、かつ意識自体が無機物化され、人知を超えたものによってコントロールされる。しかもそのシステムは、人間によって制御のきかない知能によって動かされて行く可能性もある。そうなればすでに人為性を超え、自動修復可能な破壊され得ない虚構世界の中に意識は置かれることになる。だがすでに破壊され得ないのなら、その快樂の世界がなぜ問題なのか、問題が生じる条件が消えてしまったのではないか、ということにもなる。

ここで、自己が自己を超えたものによって幸福に制御される段階は、シンギュラリティと重なってくる。しかもここでは科学的な方法によって、自己の意識状態までが幸福であるように作り変えられている。するとそこでは、もとの生物的な欲求はすでに剥き出しはならない形に整えられる可能性もある。ここで幸福と悟りとシンギュラリティとはひとつに収束してくる。キリスト教的なコンテキストでラプチャーと呼ばれるものもそれに近い。ではそこで何が問題なのか。

#### 四 キリスト教終末論とシンギュラリティ

##### 四— ラプチャーとしてのシンギュラリティ

意識がコンピュータにアップロードされるとき、そこで生物的欲求は維持されるのか、それとも欲求の変転や超越が起こるのか。仏教T



Hでは科学信仰という点で基本的に前者に立つが、行を通じて自らを変える可能性を残す点では後者に通じている。これに関して、THでは意識のアップロードをシンギュラリティの時点に位置づけ、それをキリスト教終末論のラブチャーに重ねる考え方もある。シンギュラリティは人間の能力がコンピュータの能力と逆転する地点であり、終末論のラブチャーは終末でありながら「歓喜」であるという逆転の出来事である。したがって両者に共通性はあるが、THはラブチャーとしてのシンギュラリティをどう考えるのか。

THに近い立場にありながら、THを批判的に吟味した記事をウェブ上の雑誌に多く寄稿しているウェスリー・J・スミスは、その「唯物論者のラブチャー」<sup>(32)</sup>において、THを「宗教」に相当するものと見なしている。そして能力強化によって神になろうとするTHの特徴と、神へと近づく「宗教」の性質とを類比させる。問題は、それぞれにおいて神への近づき方が同じなのか、それとも違うのかである。スミスは「THは宗教的信念が失われたり消滅してしまったりしたときに引き起こされる精神的な損害への唯物論的な代替を提供する」とし、宗教への信念を、唯物論への信念に置き換えたのがTHであるという。宗教は最終的には、証明ではなく信じることでのみ成り立つ。それは証明できない代わりに、否定もできない。この論理的に否定はできない点、また最終的に信念の事柄でもある点は、宗教にも唯物論にも共通している。

実際、THではキリスト教的な終末において起こることが、唯物論の先に起こることに重ねられている。スミスは「本当にシンギュラリティとは、あるキリスト教徒が、起こるべき『ラブチャー』ということで考えている、終末論的な信念の唯物論的な反響であることが、私には衝撃なのである」<sup>(33)</sup>という。つまりラブチャーがシンギュラリティに相当し、だとすれば終末のときに信者が空中に持ち上げられキリストに出会うことと、人間がコンピュータを操作するのではなく、コンピュータが人間を取り込んで操作することが重なってくる。これらの共通点は、人間を超えたものが向こうからやってくることであり、こちらの力を超えたものによって包まれることである。しかしTHでは私たちの精神を永遠化させるのはコンピュータのような物質的な装置であるが、キリスト教では霊的主体である点が異なるのではない。前者は後者のような肉欲から霊的状态への転換を成し得るのか。

スミスは続ける。「へブル人への手紙は、『信仰とは望まれる物事の実質であり、見られていない物事の証拠である』と述べている。それは私にとって、人がその人自身の想像の中で自身を再び作り上げることによって永遠に生きるであろう、というTH主義者の信念のために

かなりふさわしい定義に思える。」<sup>(34)</sup>このようにTHとキリスト教信仰とは私たちの「望み」であり、「見られていない物事」への信念、感覚されず「想像」されるのみの事柄という点で共通する。しかしその望みや「想像」の対象は、「自身を再び作り上げること」である限り、肉欲の生のそのままの拡張である必要はない。THは唯物論でありながら、そこに霊的な純化があってもよいのである。

キリスト教的ラプチャーとシンギュラリティとの違いに、やって来るのが霊的生命かそれとも機械的な物質かという違いはあった。ただし物質であっても、そこに予測不可能性が増大して行くなら、シンギュラリティを起こすコンピュータは生命とは区別できなくなる。するとあとの違いは、シンギュラリティを起こす主体が、そこへ私たちが帰依でき、そこで私たちが「霊」の状態になれるような、価値的な高さと優位を伴っているか否かという問題になる。

#### 四―二 神への信仰か科学への信仰か

コンピュータが自発性を持つように見えるのは、アルゴリズムに則ったプログラミングの複雑な複合の結果にすぎない。つまり正確に考えれば、私の意識のアップロードにおいても、コンピュータの純粋な自発性はない。そこからすると、シンギュラリティでの意識のアップロードにおけるコンピュータの自発性は、今のところ科学への信仰の中にあり得るのであって、証明されてはいない。無論それは、自発性の非存在の証明もできていないことでもある。

証明不可能と反証不可能の間の空間に置かれている点では、キリスト教信仰もTHも同じである。ただし、生き延びたいという我欲をそのままかなえる解決策としてはTHの方がより直接的である。禁欲や自我の抑制など、我欲を抑えることで苦を減じようとするキリスト教を含む宗教一般にあるような方法は、THにはない。どちらの方法を採用かは、近代的理念の中に生きる私たちが、キリスト教と科学技術とのどちらにリアリティを見出すかという問題に帰着する。

ひとつの可能性として、THの主張は将来の世界にとって当たり前で議論の余地のないものになることが考えられる。現在は人間と技術とは別物であり、それらが融合できるか否かが議論されているが、将来はそのような区別の存在について言及する必要もなくなるかもしれない。つまりTHの主張は奇妙であるどころか当たり前過ぎてしまい、そうした主張の集団が奇異であったことはわからなくなってしまう

う。精神をどうしたら物質である機械に組み込めるかという問いは、精神と物質とが区別できなくなった世界ではどこにあったかさえわからなくなってしまうからである。

私たちがTHを冷やかな目で見ても、それを無視できない面があるのは、現代の世界において、THの描く未来が現実化するかのよう  
に実感してしまう場面が多々あることによる。実際、技術の先端を行くIT企業のトップや、大学における最先端の研究者にTHの理念に  
共感し、それを実践しようとする人物が少なからずいる事実は、THの先端的な側面に説得力を持たせている。そして何より、THの描く  
世界は近代科学に反するのではなく、むしろその理念の最高度の実現において達成されるからである。こうした暗黙の圧力をTHは持つて  
おり、それを論駁もできないゆえ、同調者は後を絶たない。しかしTHを信念のひとつと捉えるなら、それは神の存在への信念が論駁でき  
ないのと同じ意味で論駁不能な思想に他ならない。

### おわりに

世界を物質から説明する一方で、その物質を観察する主体とその欲求だけは例外と位置づけるのが、近代科学の前提であった。だがこれ  
は近代的な唯物論の矛盾でもあった。この世界観は生を死んだ物質から峻別し、死を可能な限り避ける方向に結びつく。欲望の充足と死の  
回避を科学的な方法によって極大化させ、物質の外に置かれた主体を永遠化させるのがこの唯物論だからである。

だが唯物論を徹底すれば、主体も物質であり、したがって欲求も物質による働きである限り特権性はなく、また物質である主体が死ぬと  
いう観念も自己矛盾にしかない。なのに、なぜ私たちは死を避け生の永遠を求めるのか。

死が登場したのは、単性生殖ではなく性別が登場し、各々相異なる生物個体が明確化して、死が遺伝子的にプログラムされた結果である  
という学説が定着してきている。<sup>(35)</sup> それによれば、死は進化の結果、生物が種の生存手段として身につけてきた自然的な方法となる。だとす  
れば、なぜそれが絶対的に避けるべきものであり、反対に死と対立する生を強化、保存する試みを最大化させようとするのか。それは自己  
矛盾を含まないか。こうした「死―自然主義」と対峙し、そこへ批判と抵抗を行うことが、THが推し進めてきた態度であった。

THはこの「死―自然主義」を批判し、それが一種の自己満足であり、むしろ問題を避けるための言い訳であると見なす。またTHは、

死は避けられず、死に直面しつつ生を見つめ直すことが実存的な充実だとする態度とも正反対で、死にたくないという欲求のまま死を克服することこそが、問題解決の唯一の姿だという考えを採る。<sup>(36)</sup>しかしこれだと、生はある意味でどこまでも充足されることはない。

反対に、欲望とはその根本が否定されるときにこそ、生が充実し幸福が成就するという逆説を含むところがある。本論では仏教THやTHのラプチャーの中にこの可能性を探ってきた。しかし基本的にTHはこの逆説を省みることなく、欲望のままの自己拡大を幸福とし、我々の採るべき態度だと考える。その傾向は却ってTHの奇妙さを助長させている。しかもその傾向が、かつての宗教の役割が科学信仰に姿を変えることによって遂行されている。それでも、科学による無限の自己拡大によって苦は克服されるのか、それとも苦の原因としての欲望や執着を除去することでそれが成されるのか、という問題はまだ残るだろう。

さらにTHでは、科学的方法による無限の自己拡大が、究極的には宇宙全体に達することで、苦の克服と自己充足がなされるという考え方もある。自己の能力の無限大化の方向を宇宙全体にまで極めれば、反対に宇宙の方がこちらに入ってきて、宇宙が自らと区別できなくなるからである。そこでは、自分の意志が宇宙の意志になるという意味で両方向は共通する。確かに前者はある意味究極までの自己拡大にすぎないが、その拡大の結果、自己を超える何者もない境地に到れば、自分の意志を行使する対象となるものはすでに存在しない。その時点で私の意志は充足し、私が宇宙に拡大することと、宇宙が私になることとの区別はなくなる。そこでは、肉体の中にあつて永遠性を希求する魂の拡大欲求とは無縁となる。この宇宙全体の意識化は、シンギュラリティの究極形態であり、ティプラーのオメガポイントやポストロムのバーチャル宇宙<sup>(37)</sup>はそれに相当するが、これらについてはさらに考察が必要である。

## 注

- (1) 冲永宜司「身体の死後に意識を存続させる試みについての哲学的考察」『人間存在論』第二四号、京都大学大学院人間・環境学研究科「人間存在論」刊行会、二〇一八年七月、三三―四六頁、冲永宜司「人間の『無機物化』と精神のゆくえ」『宗教研究』第九三巻別冊、第七八回学術大会紀要特集（公開シンポジウム）、日本宗教学会、二〇二〇年三月、一八―二二頁（<http://jparas.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2020/01/vol93.pdf>）を参照。
- (2) 著名な学者だけでも、シンギュラリティを説くコンピュータ科学者のレイ・カーツワイル（一九四八―）や、宇宙がすでにコンピュータの中にある可能性を説く哲学者でオックスフォード大学教授ニック・ボストロム（一九七三―）、日本でも認知科学者で東大准教授の渡辺正峰（一九七〇―）などが

いる。企業人ではボストロムの著書を推奨するビル・ゲイツ、意識のアップロードによる不老不死を研究する科学者集団「二〇四五イニシアティブ」を主導するロシアの富豪ドミトリ・イツコフ（一九八一頃―）、二〇一三年に老化阻止研究を主目的とするバイオペンチャー「カリコ」を立ち上げたグーグル共同創業者ラリー・ペイジ（一九七三―）など枚挙に暇がなく、またカーツワイルは二〇一二年よりグーグルの技術課長を勤める。日本でもたとえば堀江貴文はその著書『健康の結論』（KADOKAWA 二〇一八）などで、THにつながるような寿命延長を唱えている。

(3) Alcor Life Extension Foundation. 将来に自分の意識を復活させることを願う人から生前に資金提供を受け、提供者の肉体を冷凍保存している、アメリカを中心とした非営利団体。マイナス一九六度の液体窒素の中に死者の脳または身体の全体を保存し、科学が発達した未来にその脳の情報を読み取り再生させる技術が完成した際、それらを復活させることを約束している。

(4) More, Max. "The Philosophy of Transhumanism," [https://media.johnwiley.com.au/product\\_data/excerpt/10/11183343/1118334310-109.pdf](https://media.johnwiley.com.au/product_data/excerpt/10/11183343/1118334310-109.pdf) p.3.

(5) Ibid., p.5.

(6) Ibid., p.4.

(7) Ibid., p.5.

(8) Ibid., p.6.

(9) Ibid., p.6.

(10) Ibid., p.7.

(11) Ibid., p.7.

(12) Ibid., p.8.

(13) Ibid., p.8.

(14) 意識がすべてコンピュータ化された状態では、意識と物質とのどちらが実在かを定めることができない。この意味で我はないとも言える。ただし仏教のTHのラトローラは、THは私の拡大を止めない性質がある点で仏教的無我とは異なるのではないかという批判に対して、THは初期のアビダルマ仏教のように、日常的な我を否定するものの、最終的に洗練された我を否定はしないだけだという。これはモアなどが言う、ハイパーエージェンシーにおいて到達される洗練された全知の主体にも共通する考え方である。

(15) Kurzweil, Ray. *The Singularity is Near*, Penguin Books, 2006, p.258.

(16) Ibid., p.258.

(17) Ibid., p.310.

(18) Holman W. Jenkins, Jr. "Will Google's Ray Kurzweil Live Forever?" *WSJ Opinion*, 12, 4, 2013. <https://www.wsj.com/articles/SB10001424127887324504704578412581386515510>

(19) More, Max. "The Enhanced Carnality of Post-Biological Life," in ; Blackford, Russell, Broderick, Damien ed. *Intelligence Unbound : The Future of Uploaded and Machine Mind*, Wiley Blackwell, 2014, p.224, etc.

(20) Ibid., p.228.

- (21) Ibid., p.228.
- (22) Ibid., p.229.
- (23) Ibid., p.229.
- (24) 簡単な例を挙げれば、小児のときに欲しかったもので、大人になって物心がつく価値を見出せなくなるものは沢山ある。大人でも、怒りや物欲といった感情が、それらを志向している自分を客観的に見つめ直すと静まったり、別のより洗練された道徳的感情などに変化することがある。その段階の自己知に到った人にとって、当初の欲望を充足させたものはすでに不必要である。これを進めて行くと、かつての欲望の対象を絶つことと、精神的に充足することが矛盾しなくなることもあり得る。宗教的な充足の理想はこれである。
- (25) 沖永宣司「私は有り、私は無いこと——意識と実在をめぐるヘーゲルとW・ジェイムズ、D・ハーディングの見解から——」『帝京大学共通教育センター論集』一一巻、二〇二〇年三月、一一二七頁。
- (26) 人間のある地点Aから、遠隔の別の地点Bまで瞬間輸送する装置を考える。その装置は地点Aで、ある人の身体組織上の情報を素粒子レベルまで解説するが、その解説と引き換えに、その人の身体も素粒子レベルまで分解してしまう。つまりその人の情報は完璧に解説されてBに電送されるが、その人の身体を構成していた物質はAで破棄され、跡形もなくなる。そして最初からBにある物質を用いて、Aからの情報を設計図としてもとの人間を再形成する。このとき2人は物質上の同一性は全く持たない。しかし情報状態はまったく同じで、外見上、行動上は同一人物にしか見えず区別不能である。それを存在論的に同一と見なすなら、脳も物質も人格的同一性の条件にならない。
- (27) La Torre, Michael. "What is Buddhist Transhumanism?" <https://www.tandonline.com/doi/full/10.1080/14746700.2015.1023993>
- (28) "Michael LaTorra explains Buddhist Transhumanism in a Nutshell" <http://www.transfigurist.org/2015/12/michael-latorra-explains-buddhisthtml>, p.2.
- (29) Ibid., p.2.
- (30) Ibid., p.3.
- (31) 「近代科学と仏教科学——科学者との対話」ダライ・ラマ法王一四世公式ウェブサイト <http://www.dalailamajapanese.com/videos/dialogue-between-modern-science-and-buddhist-science> この中でダライ・ラマは、人を幸福にするならば、仏教は基本的に近代科学を受け入れる立場をとっている。
- (32) Wesley, J. Smith. "The Materialist Rapture", *First Things*, 6.28.13. <https://www.firstthings.com/web-exclusives/2013/06/The-materialists-rapture>
- (33) Ibid., p.2.
- (34) Ibid., p.3.
- (35) 致命的な災害や飢えなどによる死を除く、何もせずとも自然に訪れる死が登場したのは、一定の生物進化の後であったことについて、例えば次のような説がある。「老化の結果としての死——自然的な加齢——は、生命が最初に現われてから後の一〇億年以上の間、登場してこなかったであろうことは明らかである。このプログラムされた死の形は、細胞が生殖との関係でセックスを試み始めたのとおよそ同じ時期に生じたように思われる。それは純潔さの究極的な消失であっただろう。」(Clark, William R. *Sex & The Origins of Death*, Oxford U.P., 1996, XI)
- (36) 意識のアップロードによる不死の実現を目指して研究を続ける渡辺正峰は語る。「普通なら成長とともに、人間には寿命があつていつか死ぬ、というあきらめがつくのですが、私の場合、青年期を過ぎてもずっと引きずっていました。意識の研究に携わる前から、『死ぬ』ということとはとんでもなく恐ろ



しいことだな、と思っていたのです。」

そしてこの恐怖の克服を、自分の側を変えるのではなく、生を永続するものに作り変えることで達成しようとする。「死の恐怖を克服できたとき、『人って死んでたんだって』と驚きをもって振り返る日がくるかもしれません」という。

またこの生の永遠化は人間の能力強化にも結びついており、「体育館一杯分ぐらいの機械脳に意識をアップロードすれば、アインシュタインが幼稚園児レベルに感じられるのでは」とも語られる。不死への希求は、エンハンスメントの強力な行使と不可分である。「機械へ意識をアップロード？ 東大准教授、不老不死への挑戦 研究の活力は『死への恐怖』」AERA、二〇二〇年七月二七日。）

宇宙全体がすでにバーチャルであるという議論は、ポストロムの二〇〇三年の論文「あなたはコンピュータシミュレーションの中に生きているのか？」が有名である。カーツワイルのシンギュラリティは、コンピュータが人間の知能を超える地点であり、それが二〇四五年のような近未来に設定されるのに対して、これはコンピュータ化された生命が物理的宇宙をも飲み込んでしまい、しかもすでにそうなっているという思想である。

右記論文では直接引用はされていないが、この思想にはフランク・ティプラーが一九九五年発行の『不死の物理学』の中で展開した、拡大した生命によって宇宙がいずれ精神化するという、オメガポイントの考えからの影響が色濃く見られる。「情報処理の操作が意のままにオメガポイントの近くまで遂行されるためには、生命は物理的宇宙全体を飲み込むほどまでその操作を拡大していなければならぬ。」「オメガポイントが近づくにつれ、生存するものは、生命が終局状態の近くで効力のあるすべての物質とエネルギーの源泉への支配を集めて獲得するように、そして、オメガポイントにおいてはこの支配が完全になるように命令する。」(Tipler, Frank J. *Physics of Immortality*, Anchor Books, 1995, pp.153-54.)

そしてポストロムが言うように、これが生命と一体になったコンピュータの計算能力の拡大によるものとすれば、私たちの宇宙がすでにそうになっていることを否定できる根拠もないのである。

(筑波大学大学院人文社会科学部研究科哲学・思想専攻非常勤講師／帝京大学文学部教授)

# What is the Agent who seeks Eternity? : Transhumanism and Self-transcendence

Takashi OKINAGA

In this paper, we examine Transhumanism which seeks human's self-expansion and eternal life. These are also the extreme ideals of modern science. However, we should consider whether we really become happy if our desire continues to expand and the applications to satisfy it increase with no end.

Transhumanism is sometimes said to be a hidden dualism, though it defines itself to be materialism. Because, it inherits the dualistic character from modern science which has a hidden observer outside of the material world in spite of its materialistic monism. Thus, the desire of the observer has become the premise of both points of view.

However, the quality of our desire may also alter and be upset if our knowledge about ourselves continue to increase along with the expansions of our abilities. And this knowledge may deserve one of the features of Hyperagency as the ideal of Transhumanist.

Now it is not rational that mechanized and inorganic agent still has the desire to expand itself and to conquer others which is due to organic body. This concept of agent in machine whose desire is refined into inorganic desire is not contradict against radical materialism which has no agent outside of the material world. Because, the standpoint of organic agent which is the hidden foundation of modern science is eliminated in inorganic computer where the border between mind and matter no longer exists.

永遠性を希求する主体とは何か——トランスヒューマニズムと自己超越——

六八